
魔女の遺産相続

白兎 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の遺産相続

【Zコード】

Z5687W

【作者名】

白鬼 成

【あらすじ】

大陸にその名を轟かせたとある魔女が500年の生涯を閉じる姿を見届けて、さつとお役御免……と思つていた彼女。

それが契約解除早々、何故かベーシッターに！？

まんまと魔女の計略にはめられた使い魔とbabyの攻防戦。

とある魔女の終わり

「今まで、世話になつたわね。ありがとう」

「何、ネルがそんなに素直だと気持ち悪い……」

これ程にも長く仕えた主は久しぶりだ。それも後、数分で終わると思うと感慨深いものがある。

目の前に横たわる女は、知略の魔女として大陸に名を馳せた齢500を超える者だ。

「本当のことを言つていいだけださ。お前は優秀な使い魔だった魔に染まつているとはいえ、所詮は人間。枯れる時は必ず来る。何と儂いことか。」

「アタシも久しぶりに楽しませてもうつたよ。ありがとう」

これで、しばらくは私もお役御免だろ。」

次第にネルの瞳が濁つていき、空っぽになつていいくのを感じた。幸せだったんだろう、死に顔も満足そうだ。陽炎のように景色が揺れる部分をなぞると裂け目が入る。裂け目から懐かしい魔の香りが溢れ、体を包む。

「サヨナラだ」

裂け目に足をかけ、潜ると、電流が弾けた。

不完全

「……何？」

こんな現象、初めてなのだが。
あまりにも長い期間こっちに居たせいかな、そうであつてくれないかな。

右手を裂け目へ入れる。

バチチッ

先程よりも小さな音と衝撃が走る。

「まさか」

まさか、でもこんな現象はソレしか知らない。
でもどうやつて？

与えられた黒のローブの紐を解き、投げ捨てる。
胸元を肌蹴させれば、

「薄いけど、ある」

右胸には薄いが、黒いインクがのたくつた様な印が形を定めず動き回っている。

「定まつていないので正式な印じゃないからだらうけど」

使い魔は魔女と契約することで人間界に渡ることができる。

契約すれば契約印が互いの心臓の上に世界に一つしか存在しない
互いの印が現れ、互いの位置やらの諸々が分かる。

そして、その印があると魔は帰ることができない。
指で印を突きながら唱える。

「汝の場所を示せ」

しづくの場合は本人にさつさと解放して貰うに限る。

無理やり引き剥がしたが為に代償として片眼が空洞になつた者が
知り合いにいる。

魔族が人間に比べて回復力があるとしても、中身が持つてかれた
んじや再生しようがないのが実際のところで。
心臓持つていかれた奴の話は聞いたことは無いが、持つていかれ
たら即死だから伝えようがない。

「そんな間抜けた死は御免だ」

目を閉じればそう遠くないところにあばら家があるらしい。

向こうは動く気配もなければ、話しかけても反応もしないとい
うい加減ぶり。

「契約違反者が偉そうにしゃがつて」

時々いるのだ、魔女が魔族を一方的に使役するのが普通だと勘違
いする奴が。

若さゆえに傲慢。

そこで対応を間違つた魔女は不利な条件を付けられたりするのだから、若さは命取り。

「契約出来るようになつたばかりの新米魔女」

引き戸を勢いよく開き、大きな音を立てる。

こういうのは最初にバシッとやつてしまふに限る。

「契約とは対等に結ぶべきであつて同意無しに結ぶものではない
のは初步だ」

こつちは出鼻を挫かれて不愉快極まりない。

交わした覚えのない契約のせいで帰るべき場所に帰れないなどい
い迷惑だ。

「……」

不完全（後書き）

一つ一つを短めに、一定の投稿を目指そうと思います。

本能

「確かにここに篭なのに、隠れているのか。」

「印が不安定なせいで印は役に立たないし、互いの印は引かれ合いつて、どこに居ても視覚を共有できるのになつてているのだが。

つながりが弱いせいか視覚はぼやけて何か判別できない。一部屋しかない小屋に一体誰が隠れることができるといつなのだろうか。

「確かに匂うんだが」

魔の力には独特のにおいがある。

分かるのは魔の中でも、極一部だけども。

何かを隠す為の術に違いない。

「用意周到に香り消しまで使いやがつて、
人間の姿じや、限界か。」

「狩りの天才舐めるなよ」

逃げ切れると思うな。

ざわり、と体が泡立つ感覚と共に体が縮んでいく。

「いやー

嗅覚が優れているのは本来なら犬だが、魔の匂いを嗅ぎ分けるのは猫に限る。

鼻を引くつかせて、シンとくぐるアンモニア臭の発信源を探れば。

『柱時計？』

聴覚も格段に上がったせいか耳に着く一定音が響く。はて、こんなあら家にこんな立派なものがあるだろ？

うか。一、二回行つたり来たりを繰り返せば、奇妙なソレ。

どうやら振り子が見える部分の透明な板はガラスではないらしい。
どの角度から見ても同じなのだ。

普通は角度を変えれば映り込む光の反射の仕方は変わる。

『ふうん、何か見たことある手口』

踊らされている感が否めない。

が、拘束を解いてもらえなければ帰れない。

試しに前足で膜を押せば足はガラスの中に埋まり、しつとりと水
のようなものが纏わりつく。
どうやら、この中は異空間に繋がっているらしい。

前足を舐めると、

『塩辛い』

海の水、か。

深呼吸して思い切って頭から飛び込めば、暗い闇の中で奥に煌々
とした光が見える。
姿を海蛇に変え、光を求める。

『捕まえてやる』

私を駆り立てるのは、本能だったに違いない。

昔から言われてきたことがある。

おまえは狩りのこととなると熱くなりすぎる、と。

光の周りには球状の薄い膜が張つている。

どうやら、その中にある光が術士らしく印が薄く発光する。長く引き伸ばした体で球体を囲み込む。

『私の勝ちだ。契約を解いてもらひ』

中の光に直接呼びかけても反応は無い。

『まだ強情を張るつもりか、……ならば引きずり出すまで』

柔らかな膜に牙を突き立てる。

存外、簡単にシャボン玉が弾ける音がして光が自分の元へ落ちて来る。

『……』

その存在に唖然とするのが早いが、異空間の異変に気付いたのが早いか。

光を抱ぐことに惑いは無い。異空間から連れ出すことも容易い。ただ、何とも苦い気持ちである。

「あの女、嵌めやがつたな」

口から吐いた言葉は泡となり消えた。

手に持つたタオルは水滴る髪を拭き終われば燃え消えた。

目の前に横たわる死人を見やる。

「どこでこんな方法を見つけたが知らないが」

腕に抱かせた赤子はすやすやと眠っている。

「これは酷すぎやしないか」

もともと、この女は一国を滅亡に追いやる程の策士で。先見の明に恵まれていたからこそその判断だろうか。

「おまえも、結局は人間の女で」

ただの人に戻った女の体は朽ちていく。

ミネルヴァの塔に戻ってきた時、一番最初に気が付いたことはミ

ネルヴァの体の変化だった。

指先は白骨化、他は多少乾燥はしているが変わらないといつ奇妙な現象。

「人間の女が魔女になるのはまあ、簡単だからな」

人間の女が魔で体を覆うことで、魔女となる。

その時、魔が体の時を止めてしまうから若い姿のものが多いのだ。

「解くことも、難しくは無い」

魔を放てば、緩やかに時は流れ始める。

「何故、そこまでして、産み落としたのか」

私には理解できない。

「死んでも、よかつた、とでも言うのか」

緩やかに流れ始めた時は、体を蝕む。

末端部分から、500年の時が流れていけば、この現象にも説明が付く。

「人間の考えることは分からない」

確かに、小さなか弱いものは庇護欲をそそり、愛しくもなる。

「私には分からない、それがお前達……人の子」

冷酷、無慈悲とまで歌われた魔女、ミネルヴァ。

「結局、お前も私には理解出来ぬ人間だつたんだな」

「さて、次はお前の遭遇について考えねば」

母親は骨と化した。

「お前の歳で契約を解く儀式などできないだらうな」

溜息をつき、赤子を抱き抱える。

「仕方あるまい、このウピスがそれまで面倒を見てやるつ

片方が死ねばもう片方も冥界に送られる。

だからこそ、契約とは慎重に行わねばならない。

それが生まれたばかりの赤子とは。

不本意ながら運命共同体だ。

運命共同体（後書き）

せひとい、あひやじ、あひやで巡つ着をめしした。

予感

不本意な契約から5年。

子供はすくすくと育つてきている。

中々に成長の早い人間は見ていて面白い。

……だが、見ていて面白いのは子供だけで、度々の訪問には嫌気がさしていた。

いつの時代も野心家な国王が納める国家は多々ある。

そんな国の使者が毎日のように訪れるのには正直忍耐がいるのだ。切り殺そうかと思ったことは一度や二度ではないが。

「私は國同士の争いごとに手を貸すほど愚かではない。一度手を貸せばその味をしめて、何度も通うべるに決まっている」

これは500年の間に経験済みなので人間の心理を知らずとも分かる。

その時は確か大陸の1／4が焦土と化した。
後で修復させられた苦労は忘れない。

何より争いごとに首を突っ込んで人間である契約者を危険にさらすことも避けたい。

それならば、早々に魔女にしてしまえばいいのだろうが、子供の成長を待たずしていきなり魔女にしてしまうのに多少の罪悪感があるのも確かのこと。

普通の人間とはか弱いから早く成長してほしい限りだ。

「どうしても、協力して頂けないのか？」

目の前の使者に会うのは何度目であるだろうか。

「何度も言わせるでない。お前達の言う名聲も財も権力も興味が

ない」

人間の欲があればそそられる言葉なのかもしぬないが、人の型を取つても所詮違う生き物であるせいか興味がない。

「交渉は成立しないよ」

さつさと帰つてくれという気持ちを前面に押し出す。

そろそろ、子供が昼寝から起きる頃だ。

「それならば、仕方ない」

あつさりとした返事に拍子抜けするが、

「こちらも少々急いでおりまして」

男の一聲で開いた扉に緊張が走つた。

絶対不可侵のあばら家で昼寝をしている筈の子供が縄で縛られ、武官の恰好をした若い男に連れられて来たのである。

「今すぐにお返事をいただきとうござります」

使者は自分の勝利を確信し、嫌らしい笑みを浮かべた。

「汚らわしい。私を齎すと言つのか」

無表情を取り繕う子供の眼にはうつすらと涙がたまつてゐる。

「小さなその子を盾に、恥を知れ！」

思わず語氣が荒くなるが、それさえも面白いらしい。

「噂は本当らしい。知略の魔女ミネルヴァは新しい少年使い魔に入れ込んでいる」と

ソレは色々な勘違いだ、といつツッコミを入れたいのをこらえる。

「その使い魔も能力は随分と低いようだ」

以前の使い魔との契約破棄は愚行でしたね、とせせら笑う。

「愚かな。貴様に魔の何が分かる？」

以前の使い魔が目の前に居るのにもかかわらず分からぬ上に、人の子と魔の違いも分からぬ。

そんな人間が私の養い子を馬鹿にすることは。

「死んで侘びるがいい」

少量の水を気管に送り込んだのだが途端に咳き込み始める使者は
何が起きたのか分からない。

「今、貴様の体に毒を仕込んだ。さつやといの森から出て行かぬ
と全身に毒が回るだらうな」

私も随分ひねくれてしまつたものだ。

あれもこれもミネルヴァ、お前のせいだぞ。

私をウピスの名の通り、狩りの名手であり子供と弱者の守護者の
本能を存分に利用するなどお前くらいいだ。

「そここの、使者を置いて行くも連れて行くも自由にすればいい。
が、使者の代りに國々へ伝えるがよい。これ以上、私を怒らせるな
と」

使者を背負い、塔から離れていく男の姿に嫌な予感がする。

「マナナン・マク・リール、何故、小屋から出でてきた

ああ、とても嫌な予感がする。

豊田式（複数形）

「田舎にこもってました、すみません。

頃合い

「恥々しい奴め」

逃がすべきではなかつた、と思つても仕方がない。

話を聞けば、あの武官装束の男が小屋のある森に侵入防止魔術が掛けているにもかかわらず侵入し、こともあろつか荒らしたのだといつ。

魔術の波動で目を覚ましたマナは私に知らせようと小屋を出たところ、扉の前に男がいて、捕まつたというのが事の顛末らしい。

「やはりただの武官ではなかつたか」

こちらに勘付かせず、森の中で何かをするとすればかなりの兵かも。マナの赤く腫れた腕を見れば、かなりきつく縛られていたようだ。手を当てれば元の白い肌に戻るのでこのへりなら別にどうともなるのだが。

「ウピス、怪我、ない？」

この少年が塔に向かつた理由はただ一つ。

私としてはその行動のせいでヒヤヒヤした。

「他に怪我は無いのか」

最近はか弱いことだけじゃない。

無鉄砲で強情さが目立つようになった。

「聞いてるのは、僕」

たどたどしい言葉とそぐわない強い瞳。

ロープの紐を取ろうとするのは私が施した術は治すものではなく移すものと知つていてるが為の行為。

無駄に頭が回るから困る。

追及の手を押さえる為に両腕を巻き込んで抱きしめる。

そうすると大人しくなるのは人間が母親を求める心情。

この子の想像通り、ローブを捲れば紅い縄の跡が付いている。
ソレを見ればどう思うかはもう分かり切っているから、人の心理

を利用すればいい。

抱きしめる手は緩めず、柔らかな髪を優しく撫でる。

「私が強いことは知っているだろ？。心配はいらない」

心も体も健全に成長し、魔に付け入る隙を与えない、それが魔女
になる為の条件。

「僕は、弱い？」

見上げる瞳は先程と打って変わり揺れている。

私には理解できない生き物であるお前が強いのか、弱いのかなど
分かる筈もなかろう。

何が健全であるか、など魔の私が知るものか。

調べてはみたが体はともかく（まだ発展途上ということが分かつ
た）心の方は分からぬまじだ。

色々、少なすぎる。

知識も、まともな人間も。

「マナ、この塔は色々不便だとは思わないか？」
また、聞いてるのに無視したとむくれる姿。

寂しそうな表情に心が痛む。

ミネルヴァなら笑わせられたのだろうに、と。

そもそも頃合いかもしれん、マナにも、私にも。

流浪

「馬鹿者」

「何すんだ……！」

頭を抱え座り込んでなお反抗的な目をする子供。

「反省が足りんようだな」

人間の成長は早い。

もう、私と頭一つ分しか変わらない。

「いつたい何度目だと思ってるんだ」

目線を外して周りを見渡す。

「言つてみる、今度は何をしようとした？」

焼け野原を見て溜息をついた。

「篝火ひとつにそんな火力を使う者があるか！」

説教されるのが気に入らないらしく、そっぽを向く姿に苛立つ。小さなマナがミネルヴァになっていく気がして気がかりだ。

あの悪巧みの為の頭の回転と火力、女王氣質が身に付いたりしたら太刀打ちできる人間などいまい。

そうならぬよう躊躇とやらをせねば私でも抑えられないだろう。襟首をひつつかみ引き寄せるとマナは思わずこちらに振り返った。私はすう、と空氣を体に満たして

「貴様は魔王にでもなる気か！！」

吐きだした。

行く先行く先を焼け野原にするつもりか、 そうなのか！と思わざるを得ない。

村の人間が慣れて來たと思えばいつもこつなる。
広く構えた住居が全焼。

姿の見られない山奥ならまだしも（それでも大騒ぎに違いない）人里に下りてくれば人の姿に人外の力。

「また、引っ越ししなくては」

顔を真っ赤にしたマナにやり過ぎたかとは思うが、この繰り返しのせいで定住はままならず、図らずも流浪の民状態だ。

「いいじゃんか、わざわざ人里で無くとも」

頭を垂れた隙に襟を掴んだ手を外し、両の手で私の手を包む。人の気も知らないで何を言うかと顔を上げれば、若干眉尻が下がつてしているのが目に入った。

申し訳ないとは思つてゐるらしい。

「グダグダ言つても起こつたことは仕方ないな」

元々一所に長くは居れないのだから。

年端のいかない子供が魔術を扱うなど目立たない筈がない。

契約印は以前のまま心臓の上でのたくつているだけにもかかわらずこの威力。

本当に契約交わしたらどうなるやう。

頭の痛い思いでこれまた何度も日かの復元魔法で借りた屋敷を修復し、最低限の荷物を持ち出す。

世に言つ夜逃げだ。

いつものように転移魔術を開拓するとこれまたいつものように絡みつく視線。

後方で香る魔力に「アソツ」を思い出す。

「まさか、ね」

ありえないことだと頭の中から追い出した。

再会

「よお」

マナを下流にある村にお使いに出し、姿が見えなくなつたところ
で声がかかる。

「何しに来た」

嗅ぎ慣れた魔力の持ち主に振り向かず、攻撃態勢を取る。
体に纏う己の魔が渦巻く。

「久しぶりの再会だといふのに、随分な挨拶だね」
何が久しぶりの再会だ。

「お前がここ数年私達を付け回していたことぐらい知つていい」
軽薄な笑い声。

こんなにも憎たらしい奴だつただろうつか。

「まあ、そんなことは想定内さ」

「さつさと失せろ、私達に関わるな」

草を踏みわけ、こちらに近づく音がする。

「何だ、あの人間の子供が気に入つたのか」

肩を抱き寄せて耳元で囁く声。

「そんなにも面白いものか？」

私のものより若干明るい茶髪が頬をくすぐる。

「見た所、仮契約もまともにしてないじゃないか」
肩越しに覗きこむアイスブルーが危ない光を宿す。

私が身動きをしないのを良いことに、腕の中に閉じ込めたかと思
うと、

「あの子を壊したら、お前はどんな顔をするのかな、アルテミウ
ス？」

水流を指差す。

一点で水が堰き止められ、川が氾濫し始める。

「あの男は何者だ」

きょとんとした、青年に再度問う。

「数年前、使者の護衛官に扮してあの塔にやつてきた男。あの国の者じやないだろ？」

別に、武官装束の癖に魔術を使つたからではない。

「しかもかなり身分が高い、違うか？」

合間を開けず続ける。

「そして、お前の契約主なんだろ？」

「……どうした、答えられない程の強制力を持つた術士には思えなかつたが」

後ろの魔はかなりの実力者で召喚にも莫大な魔を必要とする上に、うして人の世に留まらせ続けるのにもかなりの魔を消費する。

「まあ、それなりにマズイことにも手、出してるしな」

一般的に美しい造りをしている為に、どのよくな表情も様になるのだが今の感情を一言にすれば、

「それはよっぽどのことだといふことか」

歪み、そのもの。

「俺達を召喚し続けて魔力の枯渇がない奴なんて化け物だ」

それをミネルヴァは平然とやつてのけたから考えてこなかつたが確かに。

「一応は上級だしな」

「一応じやないし、俺達の力は特級ものだぞ」

それゆえに引き留めるのは難しく、必要な時に呼び出すのが基本だ。

「それで？あの子に危害を加えるのはアイツの命令か？」

唐突に彼女と俺の間にヒヤリとした冷気が走る。

「そんなに熱を上げてるのか」

「そんな冗談じや誤魔化される氣にもならん。なんだ、それともお前ともあらうものが、あやつごとに後れを取つたか？」

契約主同士の制約は力の天秤の傾きによる……よつは押し負けたのかという皮肉。

「……あんな外道と比べるな

外道、といつ言葉にギロリとこちらを睨む。

こんなにも強い視線を寄越す様な奴だつたか？

これではまるで、

「離を守る親鳥のようだな」

あの女に本能を利用して良いように使われているだけではないか。

ふん、と鼻を鳴らしたかと思えば、

「その通りかもしけんが、そんな経験も一度くらいは面白い」

「俺にはよく分からん」
俺の望み

これで、あの男の下に付く意味は無くなつた。

「それが普通というものなのだ」

彼女は500年もの間、人間界に縛られた上にその息子にまで縛
られていると思っていた。

なのに、こんなにも楽しそうだ。

「こき使われてるのかも、なんて思った俺が馬鹿だつた」

「は？」

これで、契約破棄ができる。

「だつて、こんなにも異端だとは思わねえじやんか、自分のい」

「ウピスから離れろ」

目に入ったのは先程山を下つて行った筈の少年。
濃い魔が渦巻いていた。

凍えるような声が響く。

一瞬、誰の声か考えたものの間違いなくマナの声。

「もう一度言つ、ウピスから離れる」

ギラ、ギラと光る紺色の瞳は深海のように奥底を見せようとしない。

「俺を狙ってきたのなら、そいつを狙うのは非効率的だと思うが

？」

昔から姿を変えないウピスが人ではないと理解したのはいつだったか。

その頃には魔の気配も少しずつ分かるようになっていた。

だから知っている。

こいつも俺達を付け回している奴だ、と。

人型の魔は全体的に力が強い傾向にある。

勿論、ウピスも例外では無くて。

頼りがいのある保護者の彼女が姉に見られるようになつて久しい。昔は何でも知つていていた彼女が今では世界の一般常識を軽く飛び越える事を知り、危なつかしく思うようになった。……それは俺が成長したつてことだろうか。

隣の小川の水がうねるのを感じた。

「アポロン、やめてくれ！…その子は！」

まだ魔がうまく扱えないんだ
　　渦巻く水が龍のように小川から飛び出してマナに襲いかかる。

咄嗟に近くにあった草花に送り込んだ魔。

間に合え、という気持ちと間に合わないという事実が一度に押し

寄せる。

竜巻がマナを飲み込んだ、そう思つて愕然としたその時。

「こんな手抜きで俺を倒そくなんて思つたな」

内側から水 例えると薔が花開く瞬間を見た気がする が円を描きながら広がる。

僅かに足りなかつたのだろう草花の壁が散つて、水しづきとともに降つてくる情景は幻想的だ。

「遊ぶつもりは無い、さつさと彼女を解放ししり

「何でお前に指図されなきゃいけないんだろうね？」

険悪な二人に挟まれて夢の世界から引き戻されると、腕の中から難なくすり抜けでマナの元へ向かつ。

「落ち着きなさい」

両頬に手を当てて私と目が合つて顔を上げさせむ。頭半分しか変わらないのだが体制的にはきついのかもしけない、ぴたりと動きを止めた。

振り向くこともせず、言い放つ。

今、目の前にあるものが私の守るもの、他はいらない。

「アポロン、これ以上のことをするなら、私が相手をすることにしよう」

力は同等、何が起こるかは予測不能。

「どうでも楽しそうだろ？？」

怒りに震える声が人の子に対する思い入れを存分に感じさせる。

それも、俺よりも大切だと言わんばかりだ。

ここまでキているアルテミスを見たことはない 正直、面白く

ない。

が、これ以上刺激するはも得策ではない。

「悪かつたって、もう手えだしたりしねーから怒るなって」
正面対決となれば手加減すれば俺が消し飛ぶし、かといって、

「可愛い妹に傷は付けたくないーし」

妹、と言つたか？

「なら、仮にも可愛い妹の守護対象を襲うつていつのまどうんだ
だ、アポロン」

「兄上もしくはお兄様と呼べ」

そんな声を聞きながらじやれる（アポロンの一方通行のようでは
あるが）一人をよく観察すると、似ていると言えた。

まず、せりりとした質の良い布のような亞麻色の髪。

瞳の色はアイスブルーとモスグリーンだが目の形はよく似ている。
どうやら兄妹といつのは本当らしかった。

「で、そのお兄様は何しに来たんだ？」

じやれる兄を無理やり引き剥がして本題に戻る。

「どう見ても戦意は無いようだから、余計に分からない。

「お前の契約主の子供を攫つて来いつて言われたから、適当に氣
絶させて拉致ろうと考えてた」

「どんでもないことを言つね。私から逃げられると思つてたのか
？」

正直、力の差は拮抗しているから奇襲されたらマズイとは思うが。

「元々はそういうつもりだつたんだけどさ、契約印が無かつたし」「
どこで見たんだというツッコミを押さえて続きを促す。

「元々いけ好かない奴だつたしな、粗を探しはしてた。俺の考え
では守護対象者なら攫う必要は無いと思うんだよね」

こちらの言い回しに気が付いて契約外に持ち込んだらしい。

「大体、条件で契約したつてのにこの不当な扱いだし？さつきも
言つたけどお前を敵に回したくないからやめるわ」

気になるのはそれだけじゃない。

「マナを付け狙う理由に心当たりは無いか？」

塔を出て10年ほど経つ。

今までのしつこい勧誘のわりには期間が空きすぎているのが不自然だ。

「マナを人質にとつてミネルヴァを従わせようとか考えていたとかか？」

不自然な点はあるもののそれが一番に浮かぶ。

「いや？お前達が塔から出て行つて3か月足らずでミネルヴァを追つるのはやめたようだつたな」

意外な返答におや、と思つたのを感じ取つたのだろう。

「お前の会つたつていう男、純粹な力は無いが 田は確かだ」

表情を口々口々と変える兄ではあるが基本は柔らかな表情である。それが、嫌悪に満ちたものであることに嫌な予感がした。

「外道とかそれなりにマズイことか？」

先程から気になつていた彼らしくない言葉に頷く。

「あの男はかなり趣味が悪い」

顔を顰めて、放つた言葉は私を凍らせた。

「あの男は魔女の血をすするんだ」

「そんな野郎のところにマナをやるひとしてたのか、お前は…」
急に俺の姿を隠すよに抱きしめられる。

今も昔も扱いはそう大して変わらない。

俺は成長しているつてのに、いつまでも小さな子供扱いだ。
実際、魔である彼女は1000年以上生きていることにならぬ
いから、赤ん坊と変わらないと思つていいのだろうが。
何というか、この差は一生狹まることがないのではないかと言つ
不安に包まれる。

「こいつちだつてお前の事情なんか知らなかつたんだ、仕方ねーだ
ろ？普通、今の状態見たら完つ全黒だ」

そう、互いの心臓の上にある印は黒い渦を描き続けている。

ウピスが言うことには俺が母親の腹の中に居た時に契約の移行を行つたのではないかと睨んでいて、正式に契約しなくては解除もできないらしい。

契約の移行も互いの了解がマナーで、この状況では契約違反とのこと。

「そらな、最初はミネルヴァに腹も立てた」

そんな自分の母の名はミネルヴァ。

負け戦を勝ち戦に変えるとまで言われた『知略の魔女』、だった
らしい。

冷酷、無慈悲の権化であつたその人が自身の命と引き換えに俺を
産み落としたと語る彼女は、いつも人間といつもの理解できない
と締めくくる。

「だが、永久に流れるこの命……多少の娯楽は必要だろ？」「そう、一緒に居るのはただの気まぐれ、長い時を生きる彼女の暇つぶし。

「理解できないな、ただの面倒事としか感じられない」

そう切り捨てるアポロンと名のる魔の考え方に賛同する自分。なのに、彼女の醉狂がいつ終止符を打つのか、ソレを考えると顔も知らぬ母に付けられた鎖を手放そうとは思えなくなる自分がいる。

「アイツ行動も普通じゃねーし、馬鹿だけど。お前がミネルヴァじゃねーこともお前の方が使い魔だつて分かつてたからな」

「そいつがまた何でマナを……」

とにかく、身を隠さなければなるまい。

「原因はお前自身だよ、アル」

久々に呼ばれた愛称に馬鹿にされた感がある。

「お前と契約を結ぶる程の奴は少ない。そのガキもかなりのやり手と思うのが普通だろ」

「なら、そのやり手に挑むのは無謀と思つのが普通だろ？」「負けじと言い返せば、カラカラと笑う。

「自信があるからに決まつていいだろ？」「

「アイツには俺以外に中級を3人押さえてるんだ、そろそろ俺みたいなのがもう一人欲しいんだろ？」「

「計算外だった、とは言わないが」

天変地異を起こした回数は数知れず。

山が平地になつたとか、昨日まで無かつた大樹が立つていたとか、竜巻が一国を壊滅させたとか、数えだしたら私の精神上よろしくない……ので頭から無理やり追い出す。

「危険な芽は早めに摘んでおくにこしたことは無いのだが」マナを巻き込んで全面戦争に挑んでいいものかが悩みどころである。

できるなら正式な契約を結ぶまで、本当にできるなら、一生関わりたくない。

「不可解なことが多すぎる」

「普通じゃないからな、あの男」

複数の契約は理論上不可能ではない。
ただ、それは机上の空論なのだ。

「魔物か何かか、ソイツ」

「普通の魔女だ、見た目も、力も

アイツ自身はな」

自身の身の丈に合わない相手を選べば相手の魔に浸食されて、最期は墮ちる。

そして、それが複数であつた場合は全員の契約者の魔の合計と対等以上の力の無いものは墮ちる。

よつて膨大な量の魔を持ち合わせなければ契ることは不可能に等しい。

「魔女の血は魔そのものだつたな？」

「そいうらしいね。血を飲み干すことで魔を得るらしい……俺を呼び出したのは確か3年前だ」

噂にはあった、吸血行為。

魔を奪い取るといつおぞましい行為ではあるが力を増すための方法。

「私はてっきり眉唾とばかり思っていた」

「そんな悪趣味なことする奴程小物だからな、俺らには縁が無かつたんだろう」

これ以上の力を持つ前に片付けた方が確実と思つよ

それだけ言い残して、アポロンは消えた。

これ以上力を持つ前に、といつ言葉が蘇る。

「言ってくれる」

一人なら自分以外のものを全て消せば済むが、その中のひとつだけを守るというのは実に非効率的なのである。

それならば、と考えた所で思考は中断させられる。

「何を考えているかは分からぬけど、ソレは却下」

いつ見てもその子供の瞳には驚かされる。

深海のように読めないと思えば、しけた海のような荒々しさを連想させる。

「何も聞かずに判断するのはよくないよ、マナ」

そんな私の言葉にすげなく返す少年は私の提案するつもりもなかつたが を拒絶する。

この子は15年、といつ短い時間で私の何を読み取っているのか私には理解できない。

けれど、ひとつ確信できる。

何があろうと、今私が考え付いた最良の方法に人の口口口といふものを手に抗うのだ。

何を考えているか分からない。

けれど、彼女は一人それを片付けることを考えていることは確かだつた。

生憎、自分が足手まといになつてゐる、と感じるのは成長している。

それまでやつてきた数々の悪戯。

それらが人の視線をこんなにも集めると考え付かなかつた、あの頃の自分を呪い殺したい。

ただ、少し困らせたかっただけ。それだけだつたのだ。

自分とは違うものであると言い聞かせてくる彼女は確かに、大きく考え方が違つていた。

常に理性的で穏やか、それが普通なのかもしない。

幼心に表情をえることのない彼女に違和感と不安を感じていた。それが初めて崩れたのが5歳の時。俺が団体のでかい男に縛り上げられた状態で対面した時だ。

最初は言いつけを守らなかつたが為の罪悪感と嫌われてしまうのではないかという恐怖。

勿論、これからどうなるのだろうと「う不安はあつたけれどそれ以上に嫌われることを恐れて塔を登ることが苦痛だった。

『お前は大人しくていい子だな』

その言葉は俺を安心させる効果を持つ言葉だつた。

側に居てもいいのだと思わせてくれていた。が、その時に浮かんだその言葉は、

『大人しくていい子でなければいらない』と意味しているように感じてしまつた。

対面したその時の顔は、怒り。

自分に向けられているようで、これ以上嫌われたくない一心で涙を堪えていた。

それが、男達を追い払つた後に怪我を彼女自身に移し（俺の遊び道具は魔術の本であつたので知つていた）優しく抱きしめられた。

それがどれ程、俺の心を救つてくれたのか彼女は知るまい。

いい子でなくとも、見捨てたりはしない、自分の母でもないのに。憎まれても仕方ない自分を抱きしめるその手が温かくて、我儘になつた。

もつと、かまつて欲しい。自分で見て欲しい、なんて。

困らせれば怒られて、怒られたら反省して、それを見たウピスが

仕方ないと溜息をつく。

その一連の流れには自分しかいない。

ウピスは俺の特別だ。

だから、『一人で』なんて許さない。
ずっと守つて貰つたように、今度は俺が

。

予定

「やられた」

少し目を離した隙にいなくなっている、そんなことは少くない。昨日の今日とはいえ、即日決行の彼女の性質を考えれば当然のことである。

「ことが事なんだからもうちょっと時間を置くとみた俺が悪いのか」

そうか、俺が悪いのかと遠くを見る。

一人で何て許さない、なんて考えておきながらこのザマ。

髪を搔きあげて、顔を顰める。

物心ついた頃から伸ばし始めた髪は肩甲骨を覆う程には伸びていた。

邪魔くさいと思いつながらも切らなかつた理由は契約の対価に使う為だ。

契約に必要なものは体の一部。

契約することで人は魔女となり、力を得るのは魔女も使い魔も変わらない。

仮契約の状況がいかに危ないものかを語る魔術書。

そのページは他のページよりも読み込まれているらしくヨレヨレになつていてる。

「　　仮契約、それは曖昧なものである。人界と魔界の狭間に身を置くが為に本来の力を發揮できない……そして」

いきなり苦境である。

『狩り』になると周りが見えなくなる癖をどうにかしろと耳にタゴが出来る程言われるがこれはどうにも……そろそろ直さなくては

ならないかもしない。

何故、優雅にティー・タイムをしているのだろうか。

「主は忙しい方ですので、申し訳ございませんが」さういってお待ち下さい」

芳醇な紅茶の香りと別に田の前にいる可愛らしいメイドから魔の香りがする。

所作の一つ一つが丁寧で柔らかい様子から粗野な下級とは一線を隔てていることを伺えて、正面突破は厳しいかもしれないと予定を組みなおす。

刈り取る氣で来たといつにここの扱いに正直に言えば、

「拍子抜けだ」

兄であるアポロンの魔を辿り辿り着いた先は立派な城。

身分の高い人間であるのは分かつていたのだが正直驚きだ。

「で、国王陛下とはいつ頃面会できると？」

この部屋には私以外に一人と扉の外に一人。

おそらくはアポロンの言つていた中級の三人だろう。

先程お茶を淹れてくれた彼女が困ったように首をかしげて、もう

一人扉の前に立っている背の高い黒髪の女の姿をした魔を見る。

「主は午後8時まで執務室で政務をしております。それ以降になるでしょう」「うう」とうなづく。

事務的な口ぶりからあまり好意的なものを感じ取れない。

なんというか、手持無沙汰の上に敵陣の中で落ち着くこともできそうにない。

口にしないままの紅茶が何度も入れ替えられる位しか部屋の空気を揺らすものは無く、空気が淀んでいるように感じる空間。

高い位置にある小さな小窓から差し込む田の光が無くなつて久しくなつた頃、ドアが叩かれた。

「あなたが、主？」

目線の先に居る男はとてもではないが兄が言つていた凶悪な人物とは重ならない。

線の細さは女性と見紛う程で、こちらを見る瞳は泳いでいる上に濡れている。

瞳と同色の緋色のマントも着ているというより着られている有様。年の頃はマナと同じと思うのだが怯えたように見えるその顔は幼く見える。

「……な訳無いな」

後ろに付き従っているアポロンは私の存在なんて知らないとばかりに下を向いているので話にならない。

周りに居る三人の魔も教えてくれなさそうだ、とくれば聞ける人は一人しかいないではないか。

「君は誰？」

しゃがみこみ、視線を合わせた。

途方に暮れる。

行き先のメモがある訳でもなく、かといって契約は曖昧の為に居場所が特定でない。

魔の香りだつて遠くに離れれば砂漠の中の砂金と変わらない。曖昧なものと知っていた筈だつた。

いつだつて、側に居て、手を伸ばせば届く距離。必ず、戻つてくると盲目的に信じていたのだ。

「根拠もないのに」

「その通りだな。お前の怠慢だ」

後ろから聞こえた声に振り向くと彼女に似た容姿を持つ青年がいた。

至極恼ましげである。わざとらしい程に。

「アイツ、色々と勘違いしたままでひとり飛び出すから」

「勘違い? どういうことだ?」

俺の血を奪つて力を高めること、そしてウピスの従えることが目的じゃなかつたのか?

「どちらかと言えば、後半よりだが……今、アイツが仮契約でフラフラしているのが一番危ない とにかく行くぞ!」

あの男の目的は

いつもマナにやつってきたように頬に手を当て、眼と眼を合わせる。やはり人の子、温かな手は安心させるのに一番効果がある。上気した頬、潤んだ瞳。やはり子供は可愛らしい。

「貴方が、新しいオカアサン?」

無邪氣な言葉で心を揺らがすまでは。

「オカアサン?」

それは、母親つて意味か?

「違うの?」

違う、と勢い良く否定しかける己を抑え込む。

「誰が、そんな話をしてくれたのかな」

予想外の事態に陥りそうである。

先程の怯えた顔が穏やかになってくる程に危機を感じる。

しかもその前に何か付いてなかつたか?

「お父さんが、新しいお母さんを連れて来るって」

「ちょっと、待つて。新しいお母さんってどういうことだ」

私には理解しづらい複雑家庭なのか、と若干違う方に流れながらも先を促す。

「そこに居るミルファ もカトレアもお母さんなんだつて」

そう言いながらメイド姿の魔を見る。

「そうそう、扉の所に居るアーテラだつてかつーといいけどお母さんだつて言つてた」

饒舌になる少年の言葉に基本の穏やかな笑顔に限界が来てこることを悟る。

意味が分かつて言つているのだろうか。

それつて、国の頂点に居る人間が行つ制度ではなかつたか?

それがお父さん? 実母以外の母親、愛人……ここでは妾と呼ぶのだつたか。

「ここに居る三人が母、と言つたか

色々と深みにはまつていく気がする。

「ウピスを入れたら4人だよ」

間違えてはならない、全員、少年の母とはなりえぬ存在。もう一度言う、人外だ、人の母とはなりえない。

『ウピスが、僕の母さんなの?』

小さな村に移り住んで、ようやく落ち着いてきた頃だったか。近所の子供が私のことを『マナの母さん』と呼んだらしかった。それに答えたように、答えることが出来ないのはどうしてだろうか。

私は人外で、お前の母にはなれないのだ、と。

「息子もすっかり懷いているようだ」
扉の向こうからこちらに向かってくる男、それがどうやら件の魔女であるらしい。

緋色の瞳に少年のような弱さを感じることも無いが、かといって兄から聞く狂気も読み取ることはできない。

「さあ、カルヴィン。向こうの部屋で遊んでおいで」
それはここ数年よく見ていた風景とよく似ていた。

遠退いて行く子供の姿を追えるところまで田で追い、声が届かない距離になつた所で残された魔女と視線を合わせる。

「いい子でしょう?」

「随分と可愛がつていらっしゃるようだ」

村で見た親子と変わらない、その様子がとても意外ではあったが。

「ええ、私はあの子を愛しています」

「私達には人間の感情は分からない。それでも、そんな魔達を母親にする気か?」

「そんな仮初、いつか崩れるものだ。」

「ソレで傷付くのはお前では無いよつに思つがな」

「貴方は面白い。実際に面白い……まるで人間のようだ」

「順を追えれば誰にでも予想は出来る」

「だから、貴方が欲しかつたんだ」

全く話にならん。

「何故そうなる。私達を追いかけまわす理由と母親探しの関係はどうした」

話がかみ合わないまままでいる様子だけを取れば、キチガイかもしない。

嘘と本当

「とんでもない」テマだった
後から追い付いてきた一人もソファに腰かけ、紅茶を啜る。
「危うく殺すところだった、というか、15年前なら出会い頭に
ドカンだ」

歪んだ空間から一人が顔を出すと同時に兄の手から奪い取るよう
にマナを引き寄せる。

「触れるな」

信用ならない、というのがその場の判断だった。

「この子に傷一つでも付けたら殺す」

魔女の血を啜り、力を蓄える魔女に、その使い魔（兄含む）に囲
まれた状況で安心しろというのが無理だらう。

「で、確認するが。貴様、病に侵されているな？」
紅茶で舌を湿らせ、言葉を紡ぐ。

「ええ、かなり厄介な」

「はつきり言わせてもらうが、寿命が尽きてる」

この男は死者なのだ、本当ならば。

それが生きて、目の前で話している。

「知っています」

「魔女の血を啜るというのは、それが目的か
意味ありげな笑みに溜息をつく。

魔女は人間でありながら時に反するもの。

その源を体内に引き入れれば魔との契約ができるだけではなく、
魔女にならずとも延命できる……かなりのリスクがあるが。

それはまた別の機会として、だ。

「はい。魔女たちから少しずつ頂いて命を繋いできたのですが……」

状況を見れば他の魔女を当たらなくてはならない状況になつたといふことだろう。

「断られたか」

「はい」

魔女は気紛れだ。長寿、というよりも時の流れに影響されない魔女は退屈し切っている。

力を持つた古株の魔女なんかはその傾向が顕著に表れる。

「言つとくが、マナは魔女じゃない」

「アポロン、あんなデタラメ言つたのは何故だ」

あの男に危険思想は無い。

確かに頂けない趣味ではあるが、全ては子供可愛さの行動だったではないか。

子を一人残していくことにに対する不安から、その前に死ぬことのない保護者を見つけることが目的であった。（勿論自分が生きて、守ることを第一に考えていたようだが）

マナが対象であつたのは腹立たしいが強制ではなく、あくまで頼む形の話であつた所には好感を持てなくもない。

どちらかと云ふと、自分の兄の方に悪意があつたように思えた。

マナの姿を背に隠し、何か不穏な動きでもしたら締めあげられるよつ戦闘態勢をとる。

「ちよ、ちよっと待て。別に喧嘩売らうつてわけじゃねーって髪逆立て獸か、お前は！とか何とか叫んでいたが、懲らしめてやつた。

「アイツじやねーんだよ、俺が言いたいのは！」

朝露だけではなく草花、ありとあらゆる水分を持つものが一瞬

にして蒸発する。

「まよい」

「何か、来る？」

過去

蒸発した水分は視界を遮る靄に変わる。

「マナ、離れるな」

腕の中に引き入れ、相手を迎え撃つ準備を整えた。

靄を凍らせ、地面に落とすと氷の花咲く地面に降り立ち、微笑む男が現れた。

「会いたかった」

「私は会いたくなかったがな」

黄金の髪、翡翠の瞳。

「お前が魔女になつたとは知らなかつた」

そうと知つていたなら？

「僕の使い魔になつてくれてた？」

「その前に消していただろうよ」

高くも無く、低くも無い声は耳から離れない。

「随分と嫌われちゃつてるね」

寂しいな、なんて言つていはいるがどこまで本気か分からない。

「それだけのことはしたと思わないか？」

「君に会いたいが為だけにあれだけしたんだ、少しほ靡いてくれてもいい氣がするんだけど」

どこまでも幼い、少年。

体だけは立派に成長し、背丈は自分を凌ぐ。

「会いたいが為だけにわざわざ戦争を起こす馬鹿と契約する程退屈してない」

今はどうか知らないが、とある国の王子だったこの男とはとある国で出遭った。

その国で遊学中だつた少年はその国の軍師として雇われた魔女の使い魔に異常な執着を見せたのだ。

あの手この手で自分の側にいろとせつつく少年に飽き飽きして、たものの、私本人に言つくらいなら構わないと思つていたのだが、当時の契約者のミネルヴァに、自國の父（国王）の名を出して契約の排除を求めて来るようになつた。

当然、断つていたが。

3年後、帰国したソイツに胸を撫で下ろしたものだつたが、その数カ月後、とある国に宣戦布告したのだ。

そこからが面倒な話である。

国々を転々として、細々と暮らしていたといつのに懲りずに属した国々に宣戦布告するという暴挙。

無駄に頭の回るその男は私達が行ける場所を狭めていく。

それに、痺れを切らしたミネルヴァはそれ以上の悪知恵で絶対不可侵の土地を手に入れたのだが。

簡略化してしまうと私のストーカーだ。

「つい最近まで退屈そうだったのに……その腕の中に居る子供が原因なのだろう？」

歪む顔、光る翡翠はマナを射殺さんとするように鋭い。

「だつたら何だ」

「気に入らない。飄々としたその仮面を外したくて、追いかけ続けていた女がぽつと出の子供ごときで取られるなんて、ね」

異様な空氣に眉をしかめる。

「お前、何をした」

20年そこらしか生きていかない魔女の力にしては視認できる程の濃すぎるそれに背筋が冷える。

「何つて？君と同じことをしただけさ」

すべて破棄した筈の禁書、その最後にあるハイリスクハイリターンの術。

「ねえ、そこに居る君はこの女のどこまで知つていい訳？」

狂氣

「『ジ』まで？」

「聞くな、呑まれるぞ」

アイツの無駄に回る頭は口とセツトだ。

一度耳を傾けたが最後、言葉の波に絡め取られる。

「知りたいでしょう？ 彼女が何者なのか、今までどんな時代を生む、どんな禁忌を犯したか」

「聞くな」

自分の声に動搖が走っているのが分かる。

平静を保とうとして失敗した、隠そうとした感情が表に出る。

「彼女、自分ることは話さないから。これを逃せばもう機会は無いだろうね」

知る筈がないと思う半分、過去を塗りつぶす方法は無い訳で。知らなくていいことだ、と言葉を漏らす中で、心では知らない今まで、一人で今までと同じ穏やかな時間を過ごしたかった。

「僕は知ってるよ？」

私の動搖を楽しんでいる癖に視線の的にはマナ。

声を聞かせまいとマナの頭を抱え込む。

「君も知りたいんじゃない？」

頭の中で警告音が鳴り響く。

拒絶反応と同調して、力が零れだす。

「君は僕と同じ眼をしている」

体から溢れた力が不快物質を排除しようと矢のようにに男に向かう。突き刺さる寸前、抱きしめる体が軽くなつた。

「僕の勝ちだ」

「ここは、どこだ？」

いつの間にか知らない建物の中に居た。

声をかけるのも戸惑う程に慌ただしく走り回る白衣を着た人達が行き来する廊下には紙の束が積み重なり、また所々土砂崩れが起っている。

踏んではまずいと思いながらも体は勝手に書類を踏ん付けながら廊下を行つたり来たりを繰り返す。

声を掛けようにも意思と反して意味の分からぬ言葉を一人吐き続けて、しばらく。

ぴたり

空気が固まる　これは比喩でも何でもない　ぴたりと足を止め白衣達含む俺はそこらにある紙のひとつを掴み、起動させた。

途端に吹雪が巻き起こり、壁が凍り始める。

どうやら先程の紙は魔術を防ぐ効果があるらしい。

吹雪が収まつた頃、「またか」^{部屋}「今度は何をしたんだろうな」などと囁かれるなか、事が起こつた源からひと組の男女が出てきた。

「『ごめん、みんな無事？』

「日頃の行いのせいで周りが物怖じしなくなつた氣がするな」金茶の髪を揃いのリボンで編んだよく似た双子に直感した。

「…ウピス」

力無く凭れかかるマナを支える。

「邪魔者は消えたよ」

冷水に浸かつたかのように冷えていく指先。

大量の矢に囲まれた男は状況をものとせず微笑む。

「僕を殺したくてたまらないんだろうね？」

やつてみれば良いじゃないか、そう笑うのはできないことを分かっているからだ。

「初めてだね」

体温が失われていく体がフラッシュバックを引き起こす。

「僕だけに感情を向けてくれる日が来るなんて」

「向けられて喜べるなら貴様はキチガイだな」

「たとえ憎悪としても、無関心でいられた頃よりは前進だ」

この殺伐とした空気に対してそれでも笑って返すこの男は理解できない。

「君の関心は人と関係ないとこりだらうから、僕の気持ちが分からなくたって仕方ないさ」

だから、これも分からぬだらう?とわざとらしく肩を落とす。

「君になら殺されてもいいと思う僕の気持ちなんて」

「今なら私の手で殺してやつてもかまわないぞ、マナの精神を返されねえすれば」

本当にあれば、今すぐにでも刺し殺してやりたい。

「やっぱり始祖には分かるか、この魔術も」

始祖、もう何千年の時間が経つており、人間には知る者がいらない筈の言葉。

「お前、一体何をした」

「お楽しみ、さ」

「今度は何をしでかししたんですか……」

今まで独り言としか取れなかつた声がいましがた現れた二人にかけられる。

「いやだなあ、？？？。僕らを何だと思つてるの」

「ただ加えた力が逸れて別の器具に当たつただけだ、失敗ではない」

「それこの間も言つてましたよね」

いつか事故に巻き込まれて死ぬ前に遺書書いておかないと、などと呴く自分の口。

そんな言葉から気安さを感じる 先程からの行動からして誰かの立場にいる、という感覚がしてきた。

「でも、結構おもしろい結果が出たよ」

片手を差し出し、閉じ、開いた次の瞬間に現れたのは、

「氷？」

不思議そうな声に、にんまりと双子は笑う。

「俺たちは失敗なんかしてないぜ？」

「まあ、事故と言つてしまえばそこまでだが」

ウピスは手を裏返し、甲を差し出した。

「陣が焼き付いて……！」

昔、魔術は無から有を生むことはできないのが原則で、取りだすにはそれを表す陣を描かなくてはならなかつた。

タイムラグの少ない、存在するものの形を変えて使用するのが一般的だつたのだといふ。

「これぞ

「人間でありながら人間を超えた初めての人間」

「今では普通のことだ」

火の無い所から火を取りだすなんてこと、今であれば契約なしでもできる。

動搖を見せれば新たな材料を与えることになるのだ、といい聞かせ無難な答えを返す。

「あれ、君にしては珍しいね。動搖しすぎて聞き逃したかな

くい。

「人間でありながら人間を超えた初めての人間」

人間、と確かに聞いた。

ウピスが、人間。オウムのように繰り返す中でやはり受け入れに

「これで足がかりが一つできたんじゃねー？」

「だな。魔術の軽量化、術の安定、発動時間の短縮が確認できた」

これで他国何て一網打尽だな、と誰かがうれしそうに語つた。茫然とした俺一人を置いて周りは賑やかになる。

文章が正しく聞こえない。

聞こえているのに、頭に入つてくるのは単語ばかり。

戦争・劣勢・新兵器・実験

そして、

「人間兵器」

という非人道的な言葉。

それを嬉しそうに語る顔、顔、顔。

「これは、どういうことなんだ！？」

叫んでも誰にも届かない。

「ウピス、お前のことなんて何一つ、何一つだって俺は知らない
」

だから、一番聞きたくて、一番聞いては困らせてしまつことだつ
て言える。

「俺はお前の何なんだ！」

俺にとって、大事な人はお前だけで。
お前が俺の世界で。

その世界はあまりにも大きい。

笑う彼女が遠くて、滲んで見える程だった。

「君、僕が知らないと思つて高括つてゐるでしょ」

楽しげに笑うその男の真意は読み取れない。

「ねえ？せつかく一人きりなんだから、話でもしようつよ」

ふわり笑う男は先程の狂氣を收め、傷付くのも気にせずにひらひらとやつてくる。

気の遠くなる時間で感情など抜け落ちる。

私も、兄も、他の魔達と変わらない。

ただ、流れに任せて、娛樂を求める。それが、長い時を得た者たちの辿り着く所。

なのに、怖い。

「寄るな」

足は動かず、声は揺れていた。

どうやら、足がかりを得たらしい研究員（白衣の人々、では何と
いうか誤解を招く）達は自らの体に複数の陣を刻みこんでいった。
精々、一人に対し二つか三つかに刻んだようだ。

それをあの双子は軽く飛び越す。

「所長、アンタら幾つ目ですか」

所長であるアポロンと副所長であるウピスが毎度のこと派手な爆
発を起こし、建物を揺らすしても、周りはそれぞれの持つ陣で自身
の身は確保するので「ああ、派手にやつてるなぐらう」としか思つ
ていない。

誰かの体の動きに慣れてきた俺も、此処のことが分かつてきた。
ここはどうやら研究者気質の小さな国家であること。

此處はそんな国の中核部に数ある研究所の第3号館であるらしい。数字の若い順からエリートが振り分けられるらしく、此處の研究員たちの成績は中々のもので、最近の陣を刻むという新しい方法を見つけてからとこうものの上を追い落とさんとする勢いである、と耳にした。

「幾つだったかな」

「ちゃんと数えておけ、だらしがない」

隣にいるアポロンを片割れがジトリとした目で見ながら、18個目だと答える。

「しつかり数えて報告書を出さないと援助が得られないんだから」「3号館の人間を養えるか養えないかの重要材料だぞ、という言葉。一家の長のような物言いに、現代のウピスと自分を思い出す。昔から、こんな風だったのか。

遠い、とばかり思っていた存在を誰かの体の中で過ぐしていく程に薄れていく。

「俺はいないのに、な」

縮まつていらない距離を錯覚しそうになる。

「君の研究、見せてもらつたよ

燃やし尽くした筈の研究所、存在じと消し去つた母國。どこにも存在しない筈の研究書類。

けれど、男の空氣は魔女と言つよりも

。

「なあ、お前ら、健康診断どうだつたよ?」

「何だか、かなり精密な検査でしたね」

身長体重、身体年齢……などの諸々はピリピリした環境で行われ

た。

「当然だ。私達が直々に上層部に頼んだんだから」
いつもなら、受けない輩が多い（受ければ皆、仕事中毒でベッドに括り付けられるに違いないからである）研究員達に強制執行された裏にはウピス達の依頼があつたらしい。

「頼んだ？ 体の不調を訴える者がいるのですか？」

尋ねると、少し言い淀んで、

「……研究員の半数近くがな」

そう言つた。

視線を揺らすその姿から、俺と同様に気が付いたのかもしれない。

「まさか、副所長も、ですか？」

「明日には出せるそうだ。今日はゆっくり休めと皆に伝えてくれ」
それだけ言つと、アポロンを残して一人いなくなつた。

青い顔をしたウピスが気になつたのはこの体の主も一緒だつたらしく、後を追う。

「副所長、そんなに動搖する程、重い病気なんですか！？」

この体と思つた以上に思考が重なるようになつた。視点も同じ。此處に本当に俺がいるように錯覚することが増えるのは問題だ。

「いや、生きている分には問題ないのだが……」

歯切れの悪さに先を促すのを戸惑うが、体は正直。

「なら、何だってそんなに動搖するんです？」

本当は心当たりがあつて、黙つてしているのではないかという風に疑つてしまつ。

「いや、お前には関係ないから……」

はぐらかそづとするのは丸見えだった。昔は嘘が下手だったらし
い。

誤魔化されたりしない、と口を開こうとしたところで、

「……関係無いつてことは、ないな」

そう言つて、一步近づいた。

「あくまで私の推測だから、明日まで黙つてくれ」

そう言つて、簡潔にその内容と理由を話すと足早に去つていた。耳まで真つ赤なウピス、貴重なのだが、自分も真つ赤だと思う。

人の老いを止める可能性がある。

推測に驚かされたのは認めるが、現在のウピスがいるのだ、そんな反応はしない。

原因はその推測に至つた理由だ。

「『月のモノが来ていない』なんて」

男に言つことか！！

聞きたいと思つた俺がいたんだけど、これは聞かない方が良かつたかもしない。

「僕も、君と同じ。老いない体になった」
目前に迫つた男への言葉はもう出なくて、獣のよつた威嚇するような唸り声が響く。

「やつと同じ土俵に上れた、そうだよね」

とうの昔に役目を放棄した心臓が収縮した氣がする。

「その子の手を離して、僕の手を取つてよ」
腕に抱く少年に重みを感じなくなってきた。普通は重みを増していくように感じる筈なのに。

「その子を手放せないなら、それはそれで仕方ないや」

笑みに再び狂気が混じりだす。

「じゃあ、彼を含む僕なら、受け入れてくれるよね」

午前の健康診断の後、半日の強制休暇が明けて、緊急招集。
その場で、副所長が検査結果を発表した。
ざわつく研究員達は一瞬にして静まり返り、それ以降一人として声を発したものはないなかつた。

それぞれが自室に戻るなか、俺は動かない。

「？？？」

「あれ、どういうことですか

震える声に彼女は、言つ。

「すまない」

何に対しての謝罪なのだ、それは。

「皆の人生が無茶苦茶だ」

自責の念から、そんなことまでするのか？

「そんなことじやないでしょ！？」

それではすまされない。

そんなことして、責任をとるといつのか。

燻ぶる感情のぶつけ場所が無くて、目の前の彼女に掴みかかる。

「実験台になるってどういうことですか！本当にそれで良いんですか！？」

彼女が良いと言つても、未来を知つても、そんなことは認められなかつた。

「俺は嫌です！－貴方が死ぬかもしれない、そんな……そんな、実験」

私と所長の心臓は止まりかけているそうだ。原因は刻みつけた陣の数だらう。

深く、頭を下げて、俺たちに伝える、推測。

2つ3つ位で人間の古いのスピードを緩めるらしい。

その十倍近くの陣を刻みこんだ一人の心臓は心停止のラインをかつかつ超す程度しかないらしい。

「何で、心停止まで陣を刻むなんて、無茶する必要があるんですか！？」

「それが、私の役目だ」

所長は反対しているが、これは私が望んだことだ。だから、反対してくれるな、と。

そう言つと、俺に背を向けて扉を潜る。

本当に独りぼっちになつたようで、立ち去へしていた。

「マナ？」

マナの腹越しに呪印の刻まれた腕がうつすらと見える。腕の中にある確かに温もりはそよかぜで霧散しそうだ。

「僕達とその子、結構似てるんだよね」

私にとっては唐突に、それでも表情は狙つたように語り始める。

「おかげでシンクロも早い」

「……何が言いたい」

頬に伸ばされる手を震える手で掴む。

「この手を拒めなくなるってことさ」

彼を含む僕なら。

「もうすぐだ」

魔女でも人間でもない男に今では知る人間のいない私の過去、奪われた精神と薄れていく体。

「お前、マナを取り込む氣か」

「名案でしょ？」

魔女、と言うよりは自分と同じ匂いがするのは、同じ土俵に上ったと言つたな

「言つたね」

魔になつたということ。

私の過去を知る者は人間にはいない。

すなわち、始祖たる自分と同じ時間を生きた魔から情報を得た筈だ。

「誰だ」

それだけで理解したらしく、笑う。

「さあ。ただ、君に近しい人だね……その人が僕の一部だつて聞いたら、僕のこと、振り扱えないかな？」

話が繋がった。

「過去と魔になる方法、それを取り込んで手に入れたんだな」

「所長！」

「……お前か」

振り返つたその人の元にカツカツと音を立て近寄る。

「アンタ、どういうつもりですか！？」

掴み掛られてもその首は力なく垂れたままで、その様子に万策尽きているのだと感じた。

「どうしてなんだ、いつものアンタなら首根っこ掴んででも連れ去るくらいするだろ！」

散々、叫んだ。滅多に流さない涙だつて流した。

「どうして、あの人なんだ」

他にもいるじゃないか。此処にも、居るのに。

「それを、アイツは望まなかつた」

俺の考えを読んだかのように答えを返す。

頭にウピスと違うゴツゴツした手が置かれる。

「大丈夫だ、アイツは戻つてくる」

答え

「アポロン以外に教えた奴はない筈だが」「悪さの為に真似する馬鹿者がいないと言いきれない。

肝心な部分は自分と渡り合う力を持つ兄にしか伝えていなかつた。あれだけ嫌っていた人物に彼が口を割る事は無い。

それならば、誰だ？

「どうしてそんなことが言えるんだ……！」

渦を巻く感情が、まだぶつけ足りない、碎いてしまいたいと体内でのたうちまわる。

「たく、どうしてお前は細部まで聞きたがる？それとも何だ、テーマはアイツに首つたけって訳か」

右から左へと流れた音を、もう一度飲み込む。

体中に音が走り抜け、音が言葉へと変換され、カチリとどこかのスイッチを押した。

急速に世界が眩しい程の色を放ちだし、理解する。

「そうですよ、俺は、好きだから」

掴んだままの襟をこちらに引き寄せ、睨みつけた。

「ずっと側にいた」と、失いたくないと

言い淀む、その言葉さえ押さえられずに零れ落ちる。

「共に生きていたいと、望んでしまつんだ」

声に出して、ようやく自分の気持ちを体の中に收め、手を下ろす。

「よくもまあ、シスコンの俺にそんなこと言つてくれたな

襟首を掴まれ、引き摺られる。

大人しくそのままいると、所長は急に立ち止る。

「いつまで引き摺りられてこらつもりだ」

冷ややかな声に慌てて立ち上がり自分の足に力を入れた。田の前にはこの研究室にしては珍しい鍵付きのラボ。

どうやら、そこが目的地らしい。

中に入つていくその人に続き、鍵をかける。

「これから話す内容は他言無用だ」

言葉を発する前に始末するから、と表情は朗らかに、しかし不機嫌極まりない空気を漂わせる。

「あいつが死ぬなんてことはあり得ない」

自信に満ちた言葉の数々。

いつもの実験のように話すその姿に日常の一コマを繰り広げているように錯覚してしまつ。

それでも、今し方思いを認知した相手との永遠の別れといつ悪夢を追い払つことができない。

「信じてないな、お前」

「そう言つて何度もラボを木つ端微塵にしたか覚えてますか?」

信じるというのが無理な話だ。

「そんなこと言つたって、心臓止まつてんだから仕方ねーだろ」

「……今何つった」

「だから、アイツの心臓は30分前に止まつた」

思わず、癖で匂いを探すと、微かではあるが感じる。鍵をあける動作がもどかしい。

制止を振り払い、扉を叩きつけるように開くと後ろから何かに追われているかのように駆ける。

「嘘だろ?」

「立ち直りが早いね」

「伊達に何千年の時を生きてないからな
「で？ 答えは出たのかな？」
師が生徒に答えを聞くような余裕の口調にて、鼻で笑つてやる。
「この子の命の方が大事でな
答えは田の前にあるのだから。

囚人

扉が開かれた先には懐かしい光景の中にいる養い子。

「ノックくらいしたらどうだ、マナ」

上下する胸に駆けてきたことが窺える。

田の前にいる男の思惑通りになつて堪るかといふ気持ちが腹の底から湧いてくる。

「連れ去られたなら、連れ戻すまでだ」

マナの精神を取り戻してからでも答えを調べることは遅くない。誰かの記憶はこの男の中にあるのだから、マナを探せばそれは見えて来る。

手を握りしめ心を落ち着かせると翡翠の瞳に視線を合わせ、飛び込んだ。

目を開けばひたすら続く廊下が現れた。

男の瞳と同じ色の空間は薄暗く、熱を帯びている。

そんな中で辿るのは弱弱しく金の光を放つマナとの契約印。この先にマナがいる筈だ。

幾つもの扉を通り過ぎ、ひとつつの扉に辿り着いた。ひとつだけ深い紺の扉の中に光は続いている。

一度、失ったその色。

守ると誓った、大切な色。

瞼に隠され、見えないその色。ゆづくと手を伸ばし、触れた。

白衣を肩に引っかけ、ベッドから立ち上がる。

「ウピス……？」

「とりあえず、中へ入つてきたりどひだ」

まさか、此処に現在の私がいるとは思つていなかつたのだひだ。
扉を閉め、目の前にやつてきたマナの頬に手を添える。

「思つていたより馴染みが早いようだ」

どれも3000年前と違う行動にマナと体の持ち主の境界線が曖昧になつてゐる事を悟る。

「お前の記憶だったのだな……」

そう言つたウピスは目を伏せる、その仕草に息が詰まる。
長いまつげの隙間から見えた潤んだ瞳に心を揺さぶられる。
これは懐かしさ、だけの感情なのだろうか。

泣き出しそうになるその声にあてられそうになりながら、震える
手を伸ばして頬に触れる。

「泣きたいの？」

空氣ばかりが漏れ出して声が掠れる。

「……大丈夫だ」

必死の思いで伸ばした手を下され、頬にあつた彼女の手も下ろされた。

「帰るつ、元の世界へ」

此処も安全ではない。

そう言つか言わないかのタイミングで扉の向こうから銃声が響いた。

た。

「アル！ 大丈夫か、俺だ！ いるなら返事しろ……！」

感傷に浸る暇さえ与えてくれない、過去の兄。

そつは言つても、感傷に浸るなどしたことなかつたのだが。このままでは済まないだつ。

大人しく扉を開ける。

「何事だ」

本当は知つてゐる。

「國の奴らが俺たちに危険集団の印を押した」

薄暗い窓の外に蔓延る紅蓮。

銃声と爆発、軋む建物の音にああ、始まつたのだなと思う。

「近々そうなるとは思つていはしたが」

「どうやら、アイツらが上訴文をだしたらしく」

詳しく述べるのは私の実験に関する事で出されたものだからだ。

「確かに。使用者に従わぬ武器は危険物だからな」

「んな、呑気に言つてる場合じゃねえぞ」

珍しく慌てる兄に、若さを感じる。

「上層部も思い切つたことをしたものだな。一国をたつた一人で

落とした女がいるというのに」

半日の強制休暇の日は普段から働きづめの研究員達を休ませる為、と言つのは嘘ではない。

ただ、私のスケジュールを隠す為でもあつた。

最近きな臭いと睨んでいた王国に攻め入つたのだ。

魔術を陣無しで連射するものに対抗できる筈も無く、数時間国境で足踏みしたものの王城は崩壊。

無聊など持たなかつた小国は異常な戦勝を大陸に名を轟かせた。

「お前が心臓を止めたことが漏れていたらしい」

用は、私が上からの命令に素直に従つたと つまりは死んだ、と確信したということだろう。

「ふん。愚か極まり、だな」

「早すぎやしないか」

「私達を道具として扱つていたんだ。いつかはこうなつただろう

よ

アポロンが正確な研究書類を出していなかつたことも、この襲撃に一役買つてゐる。

「國を出るのにいい機会だ」

ここから、アポロンが私達が離れることは無い。

タイミングを逃したと思いつつも、過去を変えられるかもしれないなどと思つてしまつた。

囚われたのは私の方だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5687w/>

魔女の遺産相続

2011年10月10日13時50分発行